

学校教育ビジョン		【学校教育目標】 「自分も人も大切にできる きんひがの子」 ～夢をもち、心豊かに、自ら学び行動できる児童の育成を目指して～		1. 教育活動に関する重点努力事項 確かな学力・豊かな心・健やかな体の育成 ～知・徳・体のバランスのとれた児童の育成～			2. 学校経営に関する重点努力事項 ① 組織的な学校運営 ② 教職員がやりがいを感じながら、生き生きと働ける学校づくり				
評価の項目	今年度の重点目標	具体的取組	主担当	現状及び取組状況	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考	判定結果(中間)	判定結果(最終)	今後の改善策	
①教育課程・学習指導	「子どもに委ねる授業」に取り組む。	・教育課程の工夫(カリキュラムマネジメント)に取り組む、「子どもに委ねる授業」の実現をめざす。 ・BE THE PLAYERプランの計画・実行。 ・児童自身が「自分で」「自分から」取り組む意識を育むために、学習集会や振り返りなどの機会を設ける。	教務主任 研究主任	言われたことには、素直に取り組むことができる児童が多い。一人一人が「自分で」「自分から」学習に向けて方法を選んだり、進んで取り組んだりすることに課題がある。	【満足度指標】 児童アンケートを行い、各自の学習の取組を振り返らせる。	「自分から」「あきらめずに」学習に取り組むことができたと考えた児童の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	1学期末と2学期末に児童を対象にアンケートを行う。	A	A	「自分からあきらめずに、ゴールやめあてに向かって取り組むことができる」のアンケート項目に対し、肯定的評価をした児童が94.5%であった(「そう思う」が57.1%、「どちらかといえばそう思う」が37.4%)。全体の%は2.2%下がった。プレイヤープランで単元計画を児童と共有し、1時間の流れを板書で示し見通しをもてるようにしたり、環境設定等の手立てもうって来た。毎月の集会で、学習ががんばり紹介も続けてきた。しかし、2学期になり、学習の難易度が上がったり、国語科の言語活動ゴールに書くことが多かったりしたことも原因かと考えられる。「自分のための」学習である意欲付けを意識して行っていく。次年度は、「委ねる」から「より主体的に取り組むことができる児童の育成」をめざす取組を行う。	
②生徒指導 ※いじめの未然防止	児童を主とした「自分もみんなも楽しい学校」づくりを支える。	6年生を中心として縦割り活動を企画し、「自分もみんなも楽しい学校づくり」の一員として全校で取り組む。企画委員を軸として、「自分もみんなも楽しい学校」にするためにどうすればよいか、児童に考えさせる。各月の生活目標をもとに委員会全体で達成するための行事を企画する。	生徒指導部	先生に言われたことはできるが、自分から行動を起こす児童はほとんどいない。自分たちで学校を良くしようとする意識を高め、自分たちで考えて主体的に行動させていく。	【満足度指標】 児童アンケートを行い、「自分もみんなも楽しい学校」づくりの力をいれたかどうか振り返らせる。	「みんなが楽しい学校にするためにしていることがあるか」に「ある」と答えた児童の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	1学期末と2学期末に児童を対象にアンケートを行う。	A	A	学期末の生活アンケートで、みんなが楽しい学校にするためにしていることがある児童は全校の約94.9%であった。一方で児童への学校評価アンケートでは「学校が楽しい」と答えている児童は全体の約62.6%であった。教員が設定した楽しい学校にするための取り組みが児童の「楽しさ」とつながっているとは言えないとされる。「楽しい学校とはどんな学校か。」楽しい学校にするためにどのような活動が必要か。を児童自身に考えさせて、今後の活動につなげていきたい。	
	いじめや不登校の未然防止のため、生徒指導の4つの視点を生かした授業に取り組む。	生徒指導の4つの視点を生かした授業づくりに取り組む。チェックシートを活用し、具体的な声掛けや、働きかけの方法を示す。必要に応じて児童アンケートを取り、児童の実態に即した取組になるようにする。	生徒指導主	本校の実態として、自己肯定感が低い児童が多く、共感的な人間関係が「稀薄」である。生徒指導の4つの視点のうちの、「自己存在感の感受」「共感的な人間関係の育成」に着目し、視点に沿った取り組みをしていく。	【努力指標】 毎月チェックシートに○をつけ、各自で自分の取組を振り返り、意識を高める。学期に一度、児童の実態に即しているか見直し、必要に応じてシートを改善しながら取り組む。	職員全体の「生徒指導の4つの視点を生かした授業づくり」の達成率が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	教職員のチェックシートを集計する。	A	A	12月末に行ったチェックシートの集計の結果、達成率は92%だった。1学期末の集計では達成率が98%であり、依然として高い結果であるが、2学期からは生徒指導の4つの視点を生かした授業づくりチェックシートの内容を見直ししており、各教員より本校の実態に合わせた授業づくりを意識できたと考えられる。生徒指導担当による教員向けの授業公開についても、参観した教員からは「児童の自己肯定感をあげる声掛けの仕方が分かった。」と肯定的な意見が挙がったので、今後は教員同士が参観できる環境を作っていく。	
③キャリア教育・進路指導	目標をもって生きようとし、自分の成長を振り返ることができる児童を育てる。	学期ごとに、成長メーターで振り返る機会を設ける。	学習指導部	教職員が児童の1年間の成長度合いを見る機会があまりなかった。児童においては、自分の課題を見つたり、目標に向かって粘り強くやり遂げたりすることに弱さを感じる。	【満足度指標】 成長メーターで、自分が決めた項目が伸びたと答える児童の割合が A 90%である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	成長メーターで、自分が決めた項目が伸びたと答える児童の割合が A 90%である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	学期ごとに成長メーターで振り返りをさせる。	C	B	キャリアパスポートの成長メーターで、自分が決めた項目が伸びたと答える児童の割合が88%であった。2学期は、様々な行事が多くあり、また、学校生活の中でも、自分のめあてにむかって取り組む活動が多かった。また、その中で教師が意識的に児童に価値づけを行うことができたことも数値が上がった要因であると考えられる。今後も、めあてをもって活動に取り組んで振り返り、教師がそのよさを児童に伝えることを継続できるとよい。	
④保健管理	自分の生活を振り返り、健康的な生活習慣を確立するために自分で考え行動することができる児童を育てる。	・毎週の生活チェックで、健康行動の振り返りと、できていない場合は改善していく。 ・児童のスクリーンタイムを短くし、その分「早寝」や「運動の時間」をのばす。 ・メディア使用と自身の健康の関係について、関心や危機感をもてるよう児童・保護者へ働きかける。	保健主事	昨年度のアンケート結果によると、1日のスクリーンタイムが1日2時間以上の児童が60%おり、また1日の運動時間1時間以下の児童43%いる。また睡眠時間が1日8時間未満の児童が47%いた。スクリーンタイムの長さが児童の健康生活習慣や体力の向上に害を及ぼしている現状がある。	【成果指標】 家でメディア使用についての約束ごとを決めて、それを守ることができた児童の割合80%以上を目指す。	「家でメディア使用について約束ごとを決めて、それを守ることができた」児童の割合が A 80%以上である B 75%以上である C 70%以上である D 70%未満である	6月と12月のメディア・コントロール週間後にアンケート調査を行う。	D	D	2学期の取り組みとして家庭学習強化週間とあわせて生活見直し週間(メディア・コントロール)、毎週1回の生活しらべ、2学期末から3学期にかけての生活チェックカードにて、メディアとのつきあい方を見直し改善するための取り組みを行った。また、養護教諭からの集団保健指導や各学級での担任からの指導も合わせて実施することができ、家庭でのメディア使用の約束事を守ることができた児童は9割以上であった。その一方で、決めた約束を守ることのできる児童は後期は57%とメディアの時間をコントロールすることが難しい児童の実態がある。改善を目指し、家庭にもさらに協力を得ることができるよう効果的なアプローチ方法について今一度考えていきたい。学校では引き続き長時間のゲームや動画視聴が健康や発育に害を及ぼすことを指導するとともに、児童の自己管理能力が高まるような手立てを考えていく。	
	児童の発達段階に応じて、柔軟性の向上を目指す。	・全学年共通の準備運動として、ストレッチや体幹トレーニングに取り組ませる。 ・縦割り活動や委員会活動のイベントを通して、楽しみながら柔軟運動に取り組めるような活動を委員会が企画する。	体育・健康部	昨年度の新体カテストで、柔軟性の項目において4年女子(現5年)、5年女子(現6年)、4年男子(現5年)が県平均を下回っている。	【成果指標】 5月の記録に比べ、長座体前屈の記録が向上する。	長座体前屈の記録が向上した児童の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	・5月に1回目の計測を実施する。7月に2回目、10月～11月の間に3回目の計測を実施する。	C	B	長座体前屈において5月の記録と比較したときに、記録が向上した児童の割合は70.2%(B評価)であった。また、5月は4年男子、5年男子、5年女子が長座体前屈の記録が県平均を下回っていたが、11月の測定ではいずれの学年も県平均以上という結果になった。体育委員会での企画や体育の授業の準備体操において柔軟性を向上させる取り組みを行うことができ、1学期から継続して取り組むことができた結果だと考える。来年度も今年度の取り組みを継続し柔軟性のさらなる向上を目指していく。また、今年度のスポーツテストの結果から、50m走とソフトボール投げに課題が見られた(4年男子、女子、5年女子が県平均以下)。来年度も記録の向上に向けて、継続して取り組むことを考え提案し、実践していく。	
⑤安全管理	自分の命は、自分で守ることができるよう、いざという時には自ら考え判断して行動する児童を育てる。	各学期に1回以上、避難訓練を実施し適切な経験を積み重ね、自らの命を守るためにはどのようにしたらよいか考えられる児童を育てる。	教頭 安全教育担当	ほぼ100%の児童が、避難訓練の際、指示に従うことはできている。しかし、緊張感に欠け、正しい行動をとることを目指していきたい。	【満足度指標】 自分の命を守るためにどうしたらよいのかを自分で考え行動できる。	自分で考え適切な行動ができた児童が A 95%以上である。 B 85%以上である。 C 75%以上である。 D 75%未満である。	避難訓練後、児童に振り返りのアンケートを行う。	A	A	「ふざげず真剣な気持ちで避難できた」児童は、A(とてもよくできた)・B(だいたいできた)合わせて、97%であった。Aは91%で、Aの割合が高いことから、適切な行動がとれていたことがわかる。今回は、「自分の命は、自分で守る」とはどういうことを記述させた。1年生でさえも「自分の命はひとつしかないからまもる」「だれかにたすけてもらうのではない、じぶんでにげる」と書いており、今年度の目標は達成されたことがわかる。来年度も「自分の命を守るためにはどうすればよいのか。自分で考え行動できる児童を育てる。」ことを目標に掲げていきたい。	
⑥特別支援教育	個々の児童の特性を理解し、必要な支援を行いながら、多様なあり方を認め合えるように働きかける。	・支援を要する児童について個別の記録をこまめに残す。 ・児童理解の会で課題や支援の方法について教職員の共通理解を図る。 ・専門家を招いての校内研修会を持ち、児童の特性への理解を深める。	特別支援教育コーディネーター	・学級で困り感の強い児童については、校内支援委員会を持ち、カウンセリングや専門相談、医療機関につなげている。 ・本校のSSRでは、教室に入れない児童の個々の状態に合わせた対応ができるようになった。	【努力指標】 研修会や児童理解の会を持ち、支援の方法において検討して共有し、児童の支援に生かすことができる。	多様な特性や相互理解を深める方法について学び、児童の支援に生かすことができたと感じた職員が A 95%以上である。 B 90%以上である。 C 80%以上である。 D 80%未満である。	教職員にアンケートをとり意識調査を行う。	B	C	今年度は、夏休みにカウンセリング、冬休みに子ども育成相談センターの先生方を招いて研修会を行った。また、児童理解の会を毎月末の打ち合わせ時に行えた。そして、必要な児童には専門相談やカウンセリング、他の関係機関につなげることができた。アンケートの結果からも、児童理解の会で共通理解し、たくさん教員が目で見守り、支援や指導をすることができたとの声が多かった。だが、生徒指導の面も含め、担任を中心とした小さな会がいくつも開かれていたが、全体に共有されることは少なかった。これからは、児童理解の会を充実させ、重要な点だけでも共有し、困り感のある児童の対応について全体での対応策を考える場を増やしていきたい。さらに児童間の相互理解を深めるための指導方法について教員が学び、児童に指導していく必要がある。	
⑦組織運営・業務改善	明るく元気に児童と向き合うことのできる職員とともに健康な教職員の姿を目指す。	業務の見直しを進め、精選と合理化を行う等の工夫をし、自らの働き方について考える。また、連携・協同を進めることで、業務改善に努める。	教頭	職員の3分の2が、見直しを持ち優先順位を考えた。見直したり等の工夫をしているが、業務が多く疲弊にわたっているため改善できていないと感じている。中でも校務分掌の議案作りや生徒指導案件への対応に多く時間をとられていた。保護者や地域の理解を得ながら、笑顔で児童に向き合う時間を増やすために具体的な取組を行い、業務改善を進める。	【成果指標】 業務の精選(削減)、合理化、分掌内での連携を工夫しながら推進し、時間外勤務時間を月45時間以内とする。(昨年度達成率63%、延べ人数計算)	時間外勤務時間の月合計が45時間以内の教職員が達成延べ人数(14人×月数) A 90%である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	時間外勤務時間記録から計算する。	D	D	時間外勤務時間を月45時間以内に収められた割合は64.3%で、判定結果はDであった。中間は、58.9%であったので、少しはあるが意識の高まりを感じている。ただ、文科省が示す指針「1か月45時間以下の教職員の割合100%」には、まだ遠く、意識の高まりだけではいかに不足が、改善されているとは言えない。勤務時間は、8時10分から午後4時40分であるが、児童が登校する前の7時30分以降に勤務を始める児童が79%おり、午後7時前まで校務分掌、教材準備、保護者対応に追われているのが現状である。業務の校外移管、削減、簡素化、効率化、また、分担の見直しをさらに進めていく。教職員が明るく笑顔で児童に向かい、保護者や地域にも現状を知っていただき、ご理解とご協力をいただく。	
⑧研修	国語科を中心に授業改善を図り、研究主題である「自ら課題を見つけ、主体的に学ぶ子の育成」を目指す。	国語科「読む」単元を主として、単元デザインシートを活用することで、付けた力を実践に付けるとともに、児童が「やってみよう」と思える魅力ある言語活動を設定し、児童が自立した学びとなるよう授業を構想する力を付ける。	研究主任	昨年度より国語科を中心に学校研究を進めてきた。教員は付けた力を実践に言語活動を設定する意識を持つようになってきた。ただ、児童に「やってみよう」と思える言語活動にはなっていないので、単元デザインシートを活用して授業改善を図っていくことが必要である。	【満足度指標】 児童アンケートを行い、国語科が『楽しい』学習であったかどうかを振り返らせる。	国語科の学習が「楽しい」と感じている児童の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	1学期末と2学期末に児童を対象にアンケートを行う。	A	B	国語科の学習が「楽しい」と感じている児童の割合が78.9%であった(「そう思う」が43.5%、「どちらかといえばそう思う」が35.4%)。7月にとったアンケートの肯定的回答割合は80%であった(「そう思う」が44%、「どちらかといえばそう思う」が33.3%)。肯定的回答割合はわずかに減少した。年間を通して全学年で研究授業を行なったことや1学期から継続して外部講師を招聘し、国語科の授業づくりについて学んだり、教材研究をしたりする機会を設けることができたことで、単元の見直しを児童にもたせることができた。また、司書と連携し、並行読書に積極的に取り組むことができ、教科書教材だけでなく、関連図書にふれることができたことも児童の国語科に対する意識が向上した要因と考えられる。ただ、肯定的割合が横ばいになる要因として、言語活動のバリエーションの少なさや言語活動を発信する機会が少ないことが考えられる。音声や動画でゴールを設定したり、他学年に発表したりする	
⑨保護者、地域との連携	学校と地域(家庭)が目標を共有し、連携・協働しながら、児童の学びや成長を支える。	コミュニティスクールの活動を実働化させ、保護者や地域の方に教育活動に参画してもらい、学校の教育活動を充実させる。	教頭	各学年の平均は、4回であった。保護者や地域の方のおかげで良い活動となった。道徳のゲストティーチャーを招聘しての授業、実技教科を中心とした支援者が少なかったことが残念であった。	【努力指標】 連携した授業や活動が各学年 A 年5回以上であった。 B 年4回以上であった。 C 年3回以上であった。 D 年2回以下であった。	連携した授業や活動が各学年 A 年5回以上であった。 B 年4回以上であった。 C 年3回以上であった。 D 年2回以下であった。	実施状況を確認する。	C	A	学年では、平均5回の連携ができた。学校全体(一部の参加を含む)では、計18回の活動を行うことができた。学年では、田植え等のお米関係(5年)、2、3、6年の地域の方の授業、4、5、6年の特別支援学校・居住区交流が、効果的であった。また、学校全体では、「お話とどん」お宝探検クラブ「きんひがまつり」等、大聖寺の歴史を教えていただいたり、保護者や地域の方と温かい交流を行ったりしたことが、特に有意義であった。来年度も地域や保護者と連携した授業や活動に前向きに取り組んでいく。	
⑩教育環境整備	児童が安全に、また、教職員が効果的・効率的に教育活動を行うことのできる環境を整える。	全教職員による備品・教材整備を計画的に行い、児童が自分で選んで活動できる場を増やす。	教頭	全体的な整備は、計3回行った。PCRルームをリフォーム(「学び空間デザイン」)、自由進捗学習や総合的な学習の場としてプレキンプルに使えるようにした。計画的な整備により、効果的な教育活動を行うことができた。	【努力指標】 全教職員で定期的に備品・教材の整理整頓を行う。工夫した学習の場を作る。	全教職員での整備を年間 A 3回以上実施した B 2回実施した C 1回実施した D 実施しなかった	実施状況を確認する。	C	A	夏(8月)、冬(12月)、春(3月 予定)の3回実施した。外用具庫、スタジオ、防災室を中心に役割分担して、机・椅子の一体化管理、防災具庫の整理、外用具庫の中の廃棄品の処理・テント等の整理整頓を行うことができた。計画的に整備することによって、学習道具・用具をすばやく効率的に取り出し、使用できるようになった。その他にも、研修会、監査、参観日の前には、管理場所を各担当が責任を持って片づけることができた。来年度も整理整頓するポイントを決め、役割分担を行って環境整備に取り組む。	
学校運営委員会での評価、助言	<p>(中間) ・登校の際、けがをした友達を気遣い助ける児童がいた。良い関係が築けていると思った。 ・項目の中で、学校評価の中の児童の自己評価の達成率は高いが、児童・保護者アンケートの数値の低いところが気になる。授業参観以外で参観できる場があればよい。落ち着いた授業に取り組んでいるか、楽しい学校生活を送っているか、普段の様子を見たい。 →CSの授業参観週間を設定。行事の際は、授業を送っているのぜひ見に行きたい。 ・メディアのルールが守れていない。家庭での親子の会話を大切にしたい。対人関係が希薄になっているのでは。遊び方も昔のような集団遊びが少ないのが残念。 ・家庭では、子どもへの話は、手をとめて必ず聞いてあげてほしい。学校での出来事を聞いてあげることが大切ではないか。</p>				<p>(期末) ・BE THE PLAER、委ねる授業には、良い面と工夫すべき点があるように思う。児童どうしの教え合いが負担になる児童もいるので、配慮を。 ・PCの使い方に良い面と気になる面がある。PCを気軽に使い、生活の中で生かすことのできる力がついている。半面、すぐにPCに頼ろうとする。自分の本当の力になっているのか。また、鉛筆でしっかりした字が書けない児童がいるように思う。 ・動画やゲーム、スマートフォンをさわる時間が長すぎる。家庭での教育・しつけが大切である。親自身が長い時間、使っている。初めに家庭でルールを決め守らせる、使える時間が決まる設定をする等、親子で話し合っておくことが大切。 寝不足で規則正しい生活を送ることができなかつたり、イライラしたりするのは、問題である。体を使って遊ぶこともよいのでは。学校からは、啓発活動を行ったり、メディアコントロールの良い事例を紹介したりしてほしい。</p>						